HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈授業プラン〉「アイヌ語地名入門」：川シリーズ
Author(s)	黒岩, 俊生
Citation	教授学の探究, 6, 115-137
Issue Date	1988-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13555
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p115-137.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈授業プラン〉

「アイヌ語地名入門」

——川シリーズ——

黒　岩　俊　生
（北海道教育大学岩見沢分校4年目学生）

0　はじめに

このプランは，北海道教育大学岩見沢分校の講義「社会科教材研究」（1987年度・村田文江先生担当）で，アイヌ語地名を扱うために黒岩が立案したものである。

受講学生の多くは「道内の地名はアイヌ語に由来していると聞いたことがある」「私とアイヌは無関係の様に思う」との意識を持っていた。この様な意識の学生に，（アイヌ文化全体から見れば）たとえ狭い範囲でも「具体的に『知った！』と言う実感を味わわせて，アイヌ文化に対する少しでも具体的な疑問を抱かせたい」と思った。

地名を扱うにあたっては，個々の地名を無関係に紹介すると，「地名語原のもの知り博士」に終ってしまう事を恐れた。

そこで，アイヌ語を覚えることや，現行地名の由来を覚えることは二義的なものとして特に望まず，ひたすら「地名のつけ方の基礎となった生活文化」の理解や，「地名をつけた人々の生活のイメージ」を描くことに狙いを定めた。

そのために「川は山へ行き，人も山へ行き，鮭も山へ行く」と言う筋書きを作り，それに必要な地名を道内各地から寄せ集め，川筋を中心とした一つの生活圏を示す「架空地図」の中に凝縮するという方法をとった。地名は地形と一緒に呈示され，学生は説明を聞きながら手もとの白紙（又は用紙）に，呈示された地形と地名を記入してゆき，自らの地図を完成していくと言う作業をする。元々の白紙は，一つの生活圏の地図になっていくのである。

なお，村田先生によって行なわれた授業の展開とその考察は，別に述べる機会もあろうと思うので，ここでは触れていない。

1　プランの構成

このプランは「アイヌ語地名入門—川シリーズ—」と題している。先ず「川シリーズ」を立案したのは，かつてのアイヌ民族は川に大きく依存していたので，川筋の地名が圧倒的に多く，生活上の重要性からいっても，川を抜きにしてはアイヌ語地名は語れないからである。

「川シリーズ」の目的は，「アイヌ語地名時代は，人々の多くが川筋に住んで，主食である魚を捕り，山菜や生活材料は多く沢筋に求め，内陸に狩りに行くにも，旅をするにも川筋を通行した」[注]という事を知ることである。そのために，学ぶ内容を以下の様に配列した。（山菜・狩猟・旅は別シリーズで扱う予定なので，詳しく説明していない。）

Ⅰ．川は山へ行く生きものである
　1．川は海から山へ向っている
　2．川は生きものである
Ⅱ．川口の地名は交通情報を持っている
　1．××川川口とは，××川流域への入口を示している
　2．川口の特徴を含む地名は，舟の通行の可否難易や，目印を示している
　3．本流を舟で通行し，必要によって枝沢に入った
Ⅲ．川は母の乳
　1．人は，食料・生活材料を川筋に求めて山へ行く
　2．鮭のとれる場所は，村の位置を決める重大な要因である
　3．川は人間だけのものではない

Ⅰ～Ⅲの各々に，以下の疑問が生じるだろうと考える。

Ⅰ．⟶なぜそう感覚したか？
Ⅱ．⟶なにをしに山へ行くのか？
Ⅲ．⟶サケ以外・川以外はどうなのか？

Ⅰ・Ⅱの疑問については，Ⅱ・Ⅲで一定の解答を与えてゆくが，Ⅲについては，その疑問が立ち消えになってしまわない様に，「安く・入手し易く・読み易く」かつ内容の充実した文献を紹介する。

注）山田秀三「アイヌ語地名の話」，「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典１北海道下巻』p. 1318　1987

2　プランとその解説

このプランでは，Ｂ４の白紙（又は用紙）に，地形と地名を記入していく作業が中心となる。授業者は，地形・地名を黒板に書いていくか，OHP を使用する時は，地形・地名を書いたシートを重ねていく。（コンピューター・グラフィックスを使えるならば，川筋がシュッと伸びて行ったりして楽しいと思う）

以下にプランを示すが，使用した記号の用法は，次の通りである。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　タイトル
１・２・３　小タイトル
［　　］　新出アイヌ語彙
①・②・③　作業（学習者が記入）
［　　］　説明事項
※　説明しないが，授業者は知っておくべきこと，又は，説明すべき地名の逐語訳。

Ⅰ　川は山へ行く生きもの

（白紙を配る）

① 海岸線を描く

Ⅰ－1 川は山へ行く

ペッ pet；川
ヌプリ nupuri；山

① 長い方の川を描く（海から山へ引く）
② ①の水源に山を描く。
③ ペッ（川），ヌプリ（山）を記入する
④ 短い方の川を，海から山へ向って描く。
⑤ ④の水源に山を描く
⑥ ④，⑤にペッ（川）ヌプリ（山）を記入する。

Ⅰ－2 大きい川・小さい川

ポロ poro；大きい
ポン pon；小さい
ヌプリ nupuri；山

2本の川を区別するために，相対的に長い方をポロペッ（poro-pet；大きい・川），短い方をポンペッ（pon-pet；小さい・川）という

① 2つのペッを，ポロペッ（大きい川），ポンペッ（小さい川）に改める（ポロ，ポンを，ペッの頭につけ加える）（大きい　小さい）

××ペッが（海から山へ向って）たどり着く山を××ペッヌプリと呼ぶ。
（山の名）＝（川の名）＋（ヌプリ）
ポロペッヌプリ ＝ ポロペッ ＋ ヌプリ

※全ての山の名は，この公式でついているわけではない。

② 2つのヌプリを，ポロペッヌプリ（ポロペッ山），ポンペッヌプリ（ポンペッ山）に改める。

Ⅰ－3 別れてゆく川

ペテウコピ peteukopi；川がそこで互いに別れてゆく所

① ポロペッに支流を描く（川口から）

（支流の名）＝（ポン）＋（本流の名）
ポンポロペッ ＝ ポン ＋ ポロペッ

② ポンポロペッ（小さいポロペッ）を記入する

本流と支流が(川口からたどっていって)分れる所をペテウコピ(peteukopi←pet-e-uko-opi-i) と言う
川・そこで・互いに・別れて行く・所

※ pet-e-uko-opi-i
子音と母音がつながって, te(テ)と聞える
母音が一つ落ちる o-o i-i → o i

③ ペテウコピ を記入する
川がそこで互いに別れて行く所

I－4 山奥へ行く川

パンケ panke; 下流の
ペンケ penke; 上流の
シノマン sinoman; 本当に山奥へ行く

① パンケペッ・ペンケペッを描く

本流に, 2本並んでいる支流
(下流の支流)＝(パンケ)＋(本流の名)
(上流の支流)＝(ペンケ)＋(本流の名)
パンケポロペッ ＝ パンケ ＋ ポロペッ
ペンケポロペッ ＝ ペンケ ＋ ポロペッ
※単にパンケペッ・ペンケペッともいう

② パンケペッ(下流の川), ペンケペッ(上流の川) を記入する

③ シノマンペッ を記入する。
本当に山奥へ行く川

(本流) ＝(シノマン)＋(川の名)
シノマンポロペッ＝ シノマン ＋ ポロペッ
※単にシノマンペッとも言う

I－5 あともどりする川

ホロカ horka; あともどりする
ナィ nay; 川

① ホロカナィを描く

川筋をたどって登って行くと, いつのまにか(水平方向として)もと来た方へ戻ってしまう様に曲っている川を, ホロカナィ horka-nay: あともどりする・川, ホロカペッ horka-pet: あともどりする・川と言う

② ホロカナィ を記入する。
あともどりする川

※ペッ pet とナィ nay は，どちらも川の意味。地方によって用法が異なるので，ここでは，単に川として，区別しない。

I.－6　むかしの川筋

フシコ　husko；古い
アシリ　asir；新しい

① フシコペッ（点線）を描く

自然河川なので，しばしば氾濫して流れを変える。旧川筋は「古い川」と呼び，新川筋は「新しい川」と呼ぶ。

（旧川筋）＝（フシコ）＋（川の名）
フシコポロペッ　＝　フシコ　＋　ポロペッ

（新川筋）＝（アシリ）＋（川の名）
アシリポロペッ　＝　アシリ　＋　ポロペッ

※単に，フシコペッ，アシリペッとも言う。

※新川筋は，時間がたつと，単にポロペッと言う様になる

② フシコペッ を記入する
古い川

I－7　川のからだ

ウッ　ut；あばら
カンカン　kankan；腸
シットク　sittok；ひじ
キタィ　kitay；頭
ラントム　rantom；胸
オ　o；尻

① ウッナィを描く

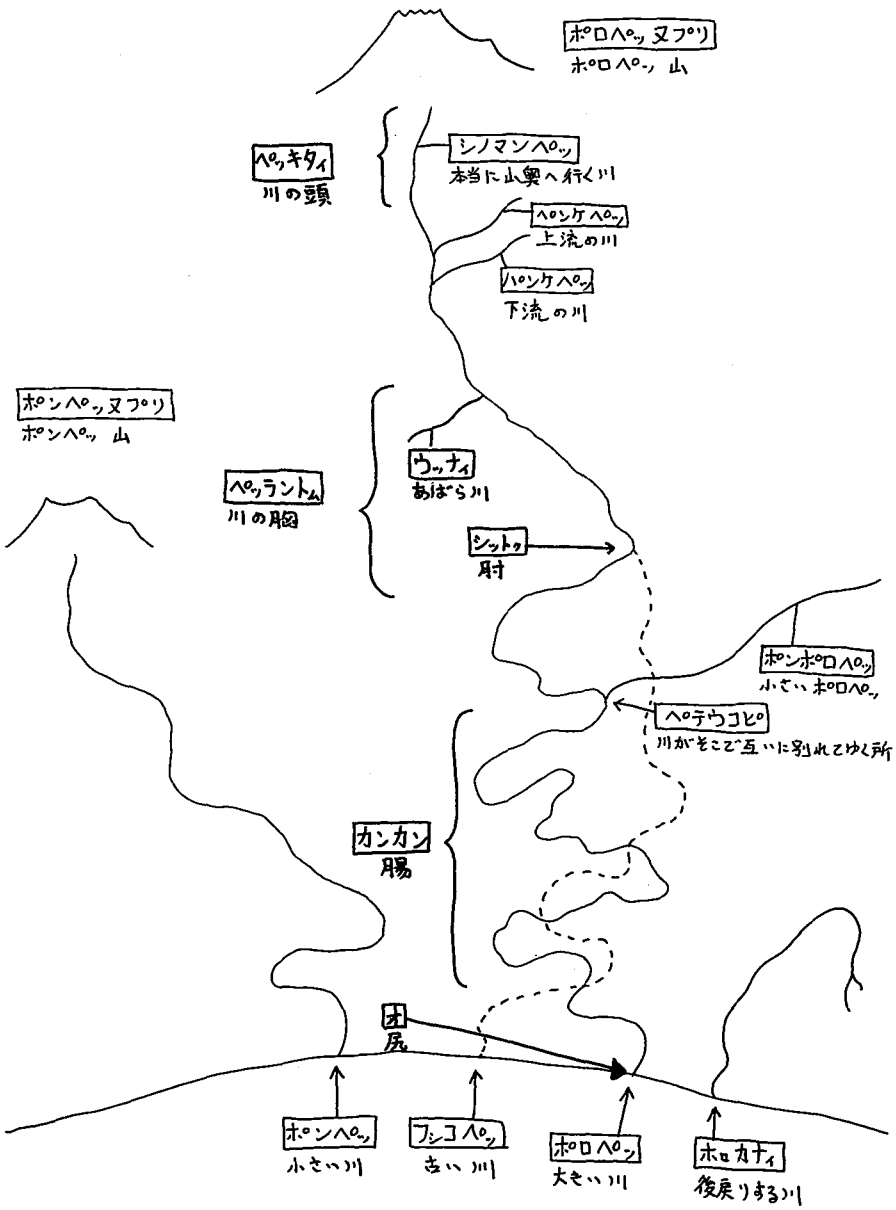
② ウッナィ を記入する
あばら川

③ カンカン を記入する
腸

④ オ を記入する
尻

⑤ シットク，ペッラントム，ペッキタィ を記入する
ひじ　川の胸　川の頭

このように，白紙から出発して，次第に地図ができあがって行く。この段階で，次のような地図ができあがっている。



Ⅰ のまとめ

◎ペテウコピ　川がそこで互いに別れてゆく所
シノマンペッ　本当に山奥へ行く川
ホロカナィ　あともどりする川

⇩

川は山へ行く

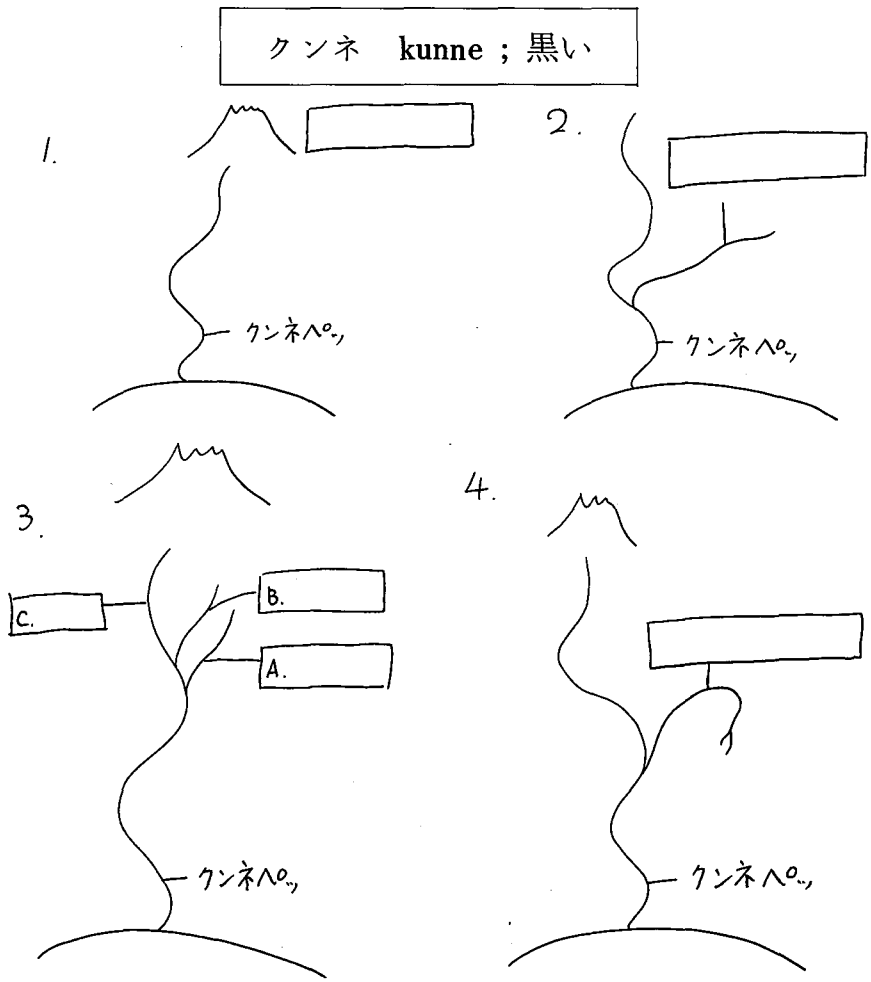
◎ウッナィ　あばら川
カンカン　腸
オ　尻
シットク　ひじ
ペッラントゥム　川の胸
ペッキタィ　川の頭

⇩

川は生きもの

Ⅰの練習問題

クンネ　kunne ; 黒い



（解　答）

※アイヌ語で書けたら　◎
　日本語で書けたら　　○
　ちょっと違ったら　　△

1．クンネペッヌプリ
　（クンネペッ山）

2．ポンクンネペッ
　ポンペッ
　（小さいクンネペッ）
　（小さい川）

3．A　パンケクンネペッ
　パンケペッ
　（下流のクンネペッ）
　（下流の川）

B　ペンケクンネペッ
　ペンケペッ
　（上流のクンネペッ）
　（上流の川）

C　シノマンクンネペッ
　シノマンペッ
　（本当に山奥へ行くクンネペッ）
　（本当に山奥へ行く川）

4．ホロカクンネペッ
　ホロカペッ
　ホロカナィ
　（あともどりするクンネペッ）
　（あともどりする川）
　（あともどりする川）

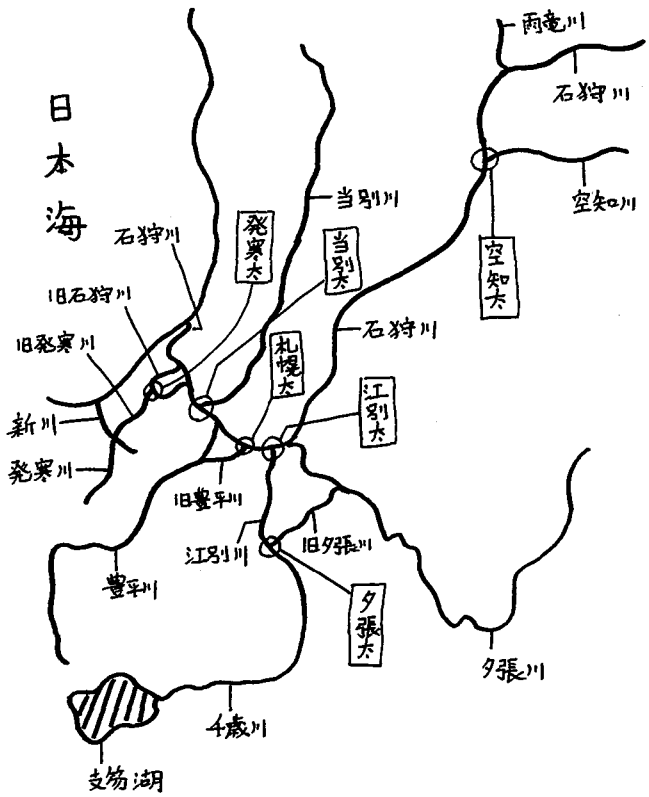
（以下，II・IIIは，はじめの用紙と完成地図のみをのせて，他は省略する）

II　川口は交通情報

（用紙―次の地図を配る）

II－1 「太」ってなーに？

プッ　put；川口 プトゥ　putu；その川口



川口をプッという。地名にはプトゥの形が多い。プッ（川口）と言わずプトゥ（その川口）と言うクセがある。

※ 「口」と言う「概念」を示す形⇨プッ put
「だれかの口」と言う「具体」を示す形⇨プトゥ putu，プトゥフ putuhu

人称	口　語	地名語
1	ku-putu（私・の口）	
2	e-putu（君・の口）	
3	-putu（彼の口）	-putu（その口）

（川の名）＋（プトゥ）＝××川の川口
××川・その川口

発寒プトゥ→発寒川・その川口
当別プトゥ→当別川・その川口
札幌プトゥ→札幌川（現・豊平川）・その川口
江別プトゥ→江別川・その川口
夕張プトゥ→夕張川・その川口
空知プトゥ→空知川・その川口

II－2 「川の名＋プトゥ」が意味するもの

ソ　so；滝
ラプチ　rapci；ごちゃごちゃ落ちる

※　ラプチ⇨ラプ（落ちる）＋チ（群起を示す接尾辞）

※　ソーラプチは，元来ソーラプチペッであったろうが，ペッが落ちて固有名詞化した川名。

① ソーラプチを描く。

② ソ（滝），ソーラプチ（滝ごちゃごちゃ落ちる）を記入する

③ ソーラプチプトゥ（ソーラプチの川口）を記入する

○○プトゥを入れば，○○川流域へ行ける。
○○プトゥは，○○川の入口

II－3 入口に目印のある川

オ-　o-；川口
オ　o；ある（動詞）
ウシ　us；群生する，ついている
モシリ　mosir；島
ニ　ni；木
サラ　sar；ヨシ原
-イ　-i；者（川は生きものだから）
ヌプ　nup；野

① サラを描く

② サラ（ヨシ原）を記入する

③ オサラペッを描く

④ オサラペッ（川口がヨシ原の川）を記入する

川口の植生が川の名になっている
（川口）＋（何か）＋（ある）＋（川）
※オ　＋　○○　＋　オ　＋　ペッ

					＋ナィ
					＋イ
※オ	＋	○○	＋	ウシ	＋ペッ
・					＋ナィ
					＋イ

⑤ オニウシの川口の木と，オニウシ（川）を描く

⑥ オニウシ を記入する
川口に木が群生する者

オ・ニ・ウシ・イ
※オニウシ← o-ni-us-i；川口・木・群生する・者

⑦ モシリ（中州）と，オモシロナィを描く

⑧ モシリ（島） と オモシロナィ（川口に島がある川） を記入する

オ・モシリ・オ・ナィ
※オモシロナィ← o-mosir-o-nay：川口・島・ある・川

II－4　川口に障害物のある川

ム　mu；ふさがる
チャラセ　carse；すべり降りる（急流）

① オソウシを描く

② オソウシ を記入する
川口に滝がついている者

川口の状態を示すことが，川名になっている。→その川口を通行できるかどうかを示している。

（川口）＋（○○している）＋（川）

オ	＋	動詞	＋	ペッ
			＋	ナィ
			＋	イ

③ オチャラセナィを描き，オチャラセナィ を記入する
川口がすべり降りる川

オ・チャラセ・ナィ
※オチャラセナィ← o-carse-nay；川口・すべり降りる・川

④ オムペッを描き，オムペッ を記入する
川口ふさがる川

※川口が砂でうまってしまう。

オ・ム・ペッ
オムペッ← o-mu-pet；川口・ふさがる・川

II－6　交通手段は舟

川を舟で行き来し，本流からいろいろな支流へ舟で出掛けたからこそ，これらの「川口地名」がついた。

II－7　谷地はバイパス

チプ　cip；舟，川舟
ニタッ　nitat；谷地
ティネ　teyne；じめじめしている
トゥラシ　turas；通行する

① 谷地を描く

② チプトゥラシを描く

③ ティネニタッ（じめじめした谷地），チプトゥラシ（舟が通行する者）を記入する

※チプトゥラシ← cip-turas-i（チプ・トゥラシ・イ）；舟・通る・者

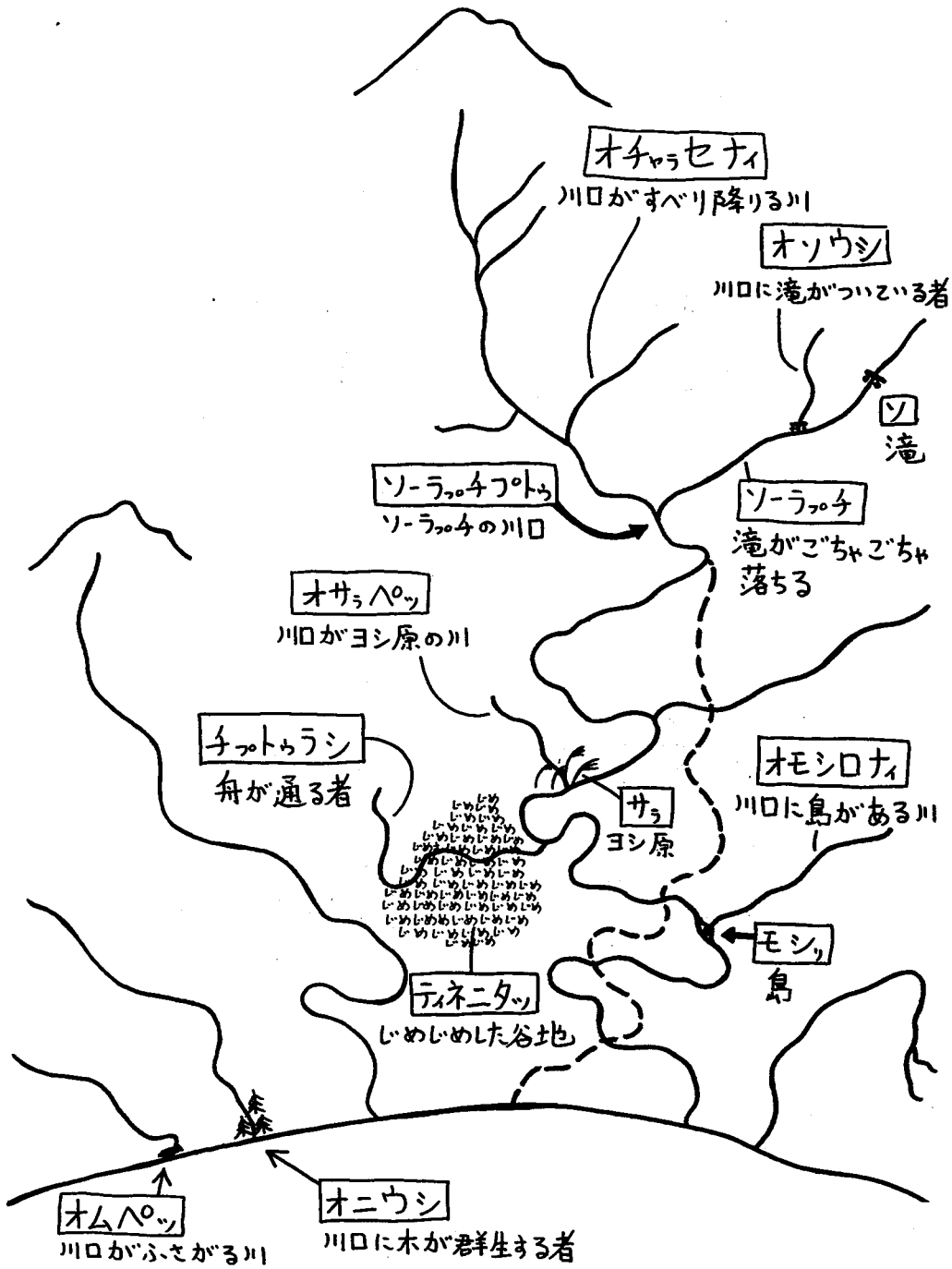
川舟は，小さく，吃水も浅いので，小川や湿地を通行できた。
チプトゥラシは，ポロペッ―ポンペッ間のバイパス

IIのまとめ

◎「川の名＋川口」→ある川（と，その流域）への入口を示している
◎川口の状態が，川全体の名になっている地名→その川へ入る目印や，舟の通行の可否難易を示している

⇩

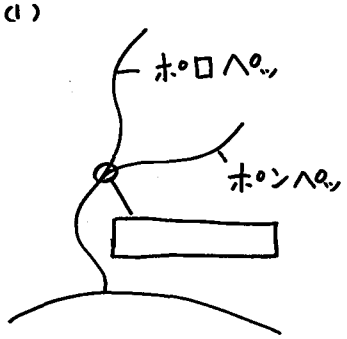
川口は，交通情報を持った地名


オチャラセナィ
川口がすべり降りる川
オソウシ
川口に滝がついている者
ソ
滝
ソーラップチコプトゥ
ソーラップチの川口
ソーラップチ
滝がごちゃごちゃ
落ちる
オサラペッ
川口がヨシ原の川
チップトゥラシ
舟が通る者
サラ
ヨシ原
オモシロナィ
川口に島がある川
モシリ
島
ティネニタッ
じめじめした谷地
オムペッ
川口がふさがる川
オニウシ
川口に木が群生する者

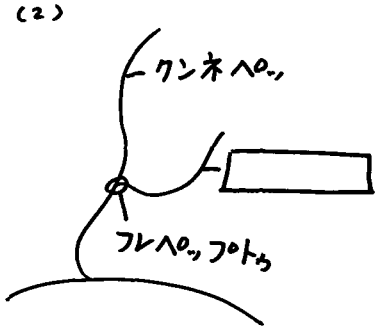
IIの練習問題

フレ　hure ; 赤い
ペレペレケ　perperke ; 裂け裂けしている
ト　to ; 湖

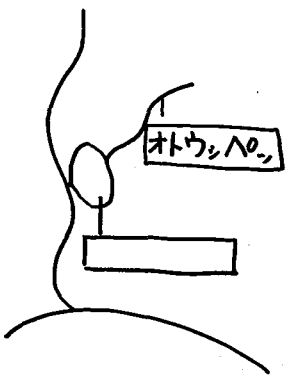
(1)



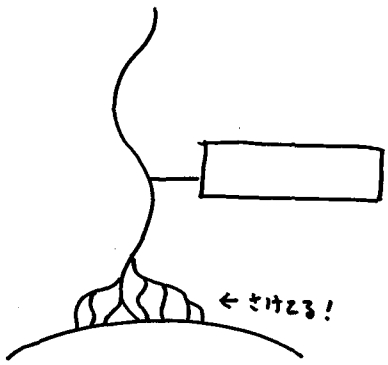
(2)



(3)



(4)



(解　答)

(1)　ポンペップトゥ
　(ポンペッの川口)

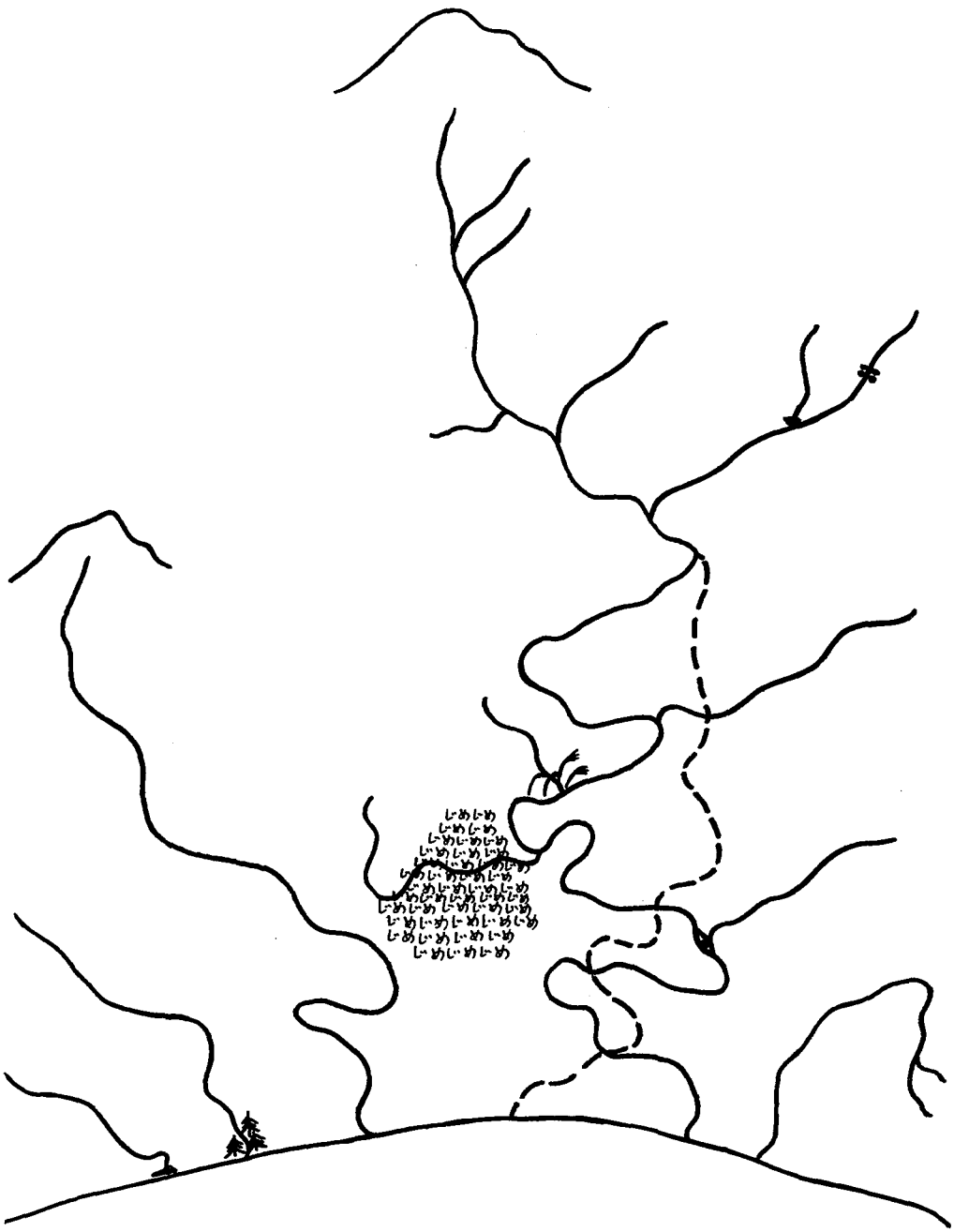
(2)　フレペッ
　(赤い川)

(3)　ト
　(湖)

(4)　オペレペレケペッ
　オペレペレケナィ
　(川口さけている川)
　(川口がさけている川)

Ⅲ　川は母の乳

（用紙―次の地図を配る）

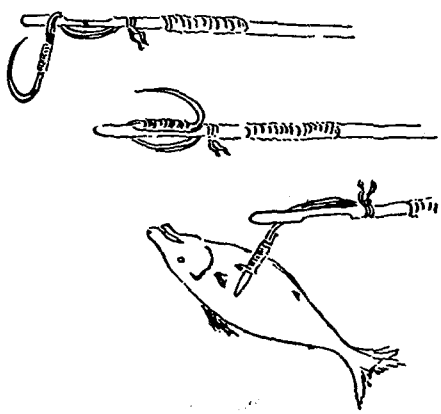


Ⅲ－1　マレプで鮭を獲る！

イチャン　ican；サケ・マスの産卵場

※マレプの実物を持って来て，鮭に見立てた編みかごなどを突いてみせる

マ レ プ



マレプは主に浅い所で使う

① イチャンを描き，記入する

イチャンは浅く・よく見え・鮭は動きにくいので，好漁場である

※マレプは，舟に乗りながら使うこともある。

Ⅲ－2　舟は山で作った

ランコ　ranko；桂の木
タ　ta；ほる
ウシ　us；～しつけている，いつも～する
-イ　-i；所

舟の材料は桂が多い。桂は柔くてほりやすく，軽くて操舟し易い

① ランコシを描き，ランコシ（桂群生する所）を記入する

※ランコシ←ranko-us-i（ランコ・ウシ・イ）；桂・群生する・所

舟は，木をきったその場所へ通ってほる

② チプタウシ（舟をほりつけている所）を記入する

※チプタウシ←cip-ta-us-i（チプ・タ・ウシ・イ）；舟・ほり・つけている・所

○○群生地＝植物名＋ウシ＋イ
　　ペッ
　　ナィ
動詞＋ウシ＋ナィ＝～しつけている川（所），いつも～する川（所）
　　ペッ
　　イ

◎サケを獲りに・生活材料をとりに人は山へ行く

Ⅲ－3　ホッチャレは保存用（越冬用）

ウライ　uray；（口を上流に向けて仕掛ける）やな
コタン　kotan；村

イチャンでとる鮭―産卵前・油が多い
〈当座の食料〉
ウライでとる鮭――産卵後・油が少ない
〈冬の食料〉大量にとる

※油の多い鮭は，油やけして乾燥・保存に向かない。

① ウラウシを描き，ウラウシ（ウライある所）を記入する。

ウライ　ウシ・イ
※ウラウシ←uray-us-i；ウライ・ある・所

たくさんとるのは，産卵後のホッチャレだから，ウライをかける場所の近くに村があると便利です

② コタンを描き，コタン（村）を記入する

氾濫によって川筋が変ると，村も移動する

③ フシココタンを描き，フシココタン（古い村）を記入する

Ⅲ－4　犬も川のおかげで生きられる

スプン　supun；ウグイ

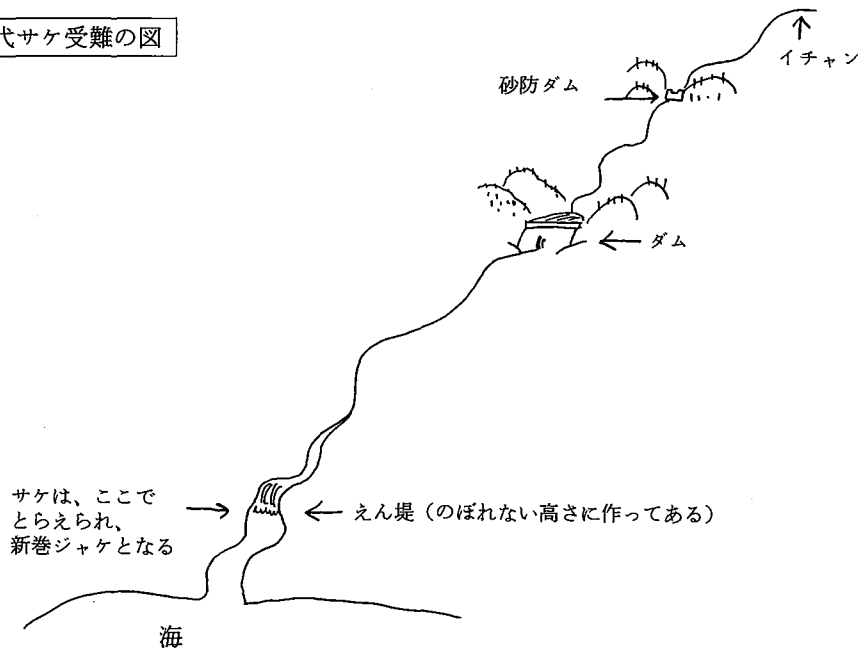
① スプンペッを描き，スプンペッ（ウグイ川）を記入する

犬は，ウグイを主にエサとして与えられた

Ⅲ－5　現代サケの受難・シマフクロウの絶滅・クマの飢餓

ここまでは，アイヌ語地名時代の人と川との関わりを，再構成したものであって，現在アイヌ民族がその様な生活を（意識は別として）しているのではない。昔の話だ，と言う事である。

現代サケ受難の図



サケが川口で止められ，ダムをのぼれず，砂防ダムにはばまれていると，山奥でサケを待っているシマフクロウは絶滅の危機に至り，クマは飢えて里を襲う。

Ⅲ－6　キツネのチャランケ

萱野茂『キツネのチャランケ』（s 49，小峰書店）から，「キツネのチャランケ」を朗読する。

キツネのチャランケ(談判)

支笏湖ちかくの，ウサクマイというところに，たいへん心がけのよい，ひとりのアイヌのわかものがすんでいました。

村のちかくには，シカやクマがたくさんいるたかい山があり，肉を食べたいときは，弓矢をもってちかくの山へいき，いつもたくさんシカやクマをとってきては，村の人たちにわけてやったり，干し肉などをつくって，かぞくとたのしくくらしていました。

またちかくには，水のきれいな川がながれていて，秋になるとたくさんのシャケがたまごをうむために，川をさかのぼってきます。そのさかなをとって冬の食料とするために，とおくの平取コタン(村)からも，たくさんのアイヌたちがやってきました。

しかし，シャケを食料とするのは，アイヌばかりではありません。山にすむクマやキツネなどの動物たちも，川をさかのぼってくるシャケをとって，おたがいにじゃまをしあうこともなく，なかよくくらしていました。

そうして，平和にくらしているうちに，そのわかものもすっかり年をとり，いまは山へクマ狩りにいくこともなく，家で彫刻などをしながら，くらしていたのです。

ある夜のこと，いつものように，おそくまで仕事をしたあと，ふとんにはいり，うとうととしたころ，とおくのほうから，人の声がきこえてきます。こんなま夜なかに，だれがきたのだろうと思い，耳をすますと，きこえなくなります。頭をまくらの上へおくと，またとおくのほうから，人の声がきこえてくるのです。

ふしぎに思って，かぞくの者が目をさまさないように，こっそりふとんからぬけだし，家のそとへでてみました。そとは月があかるくてらしていて，目をこらすと，かなりとおくのものでも，見ることができます。

そこで，声のするほうへむかって，ゆっくりゆっくりと足音をしのばせて，あるきはじめました。だんだんちかづいてきくと，その声は，どうも人間の声のようではありません。しかも，その声は，川のむかいがわの水べのほうからきこえてくるのです。

なおも足音をしのばせてちかづき，じっと目をこらして見ると，それは一びきのキツネでした。そのキツネが，人間のことばをつかって，なにかしきりに，しゃべっているのです。耳をすましてきくと，アイヌにむかって「チャランケ(談判)」をしているのです。

「こら，アイヌども，よくきけ。シャケというものは，アイヌがつくったものでもないし，もちろん，キツネがつくったものでもない。けれども，シャケを食べる動物ぜんぶが，なかよくわけあって食べるようにと，石狩川の川口をつかさどるピピリノエクル(男の神)とピピリノエマッ（女の神）という，ふたりの神さまが，シャケをさかのぼらせるとき，数をかぞえて，この川のぶんはどのくらいというように，数をきめている。アイヌもクマも，われわれキツネや，そのほか，シャケを食べる動物たちがじゅうぶんに食べても，なおあまるほどに，シャケをさかのぼらせているのだ。

それなのに，きょうの昼ごろ，アイヌがとっておいてあった，たくさんのシャケのなかから，一ぽんだけかってにとって食べると，そのアイヌは，わたしに，アイヌがいえると思う，ありったけの悪口をいったのだ。その悪口は，まるで，まっ黒いほのおのように，わたしにおそいかかり，そのうえ，アイヌがすんでいる国土に，われわれキツネがすめないように，すべての神さまたちにつげ口したのだ。

それで，神さまは，アイヌのいうことだけをきいて，われわれキツネを，木も草もはえていないし，小鳥もすめないとおくの国の，はだかの山へおいはらうかもしれないのだ。このままでは，たいへんなことだ。神でもアイヌでも，わたしのいいぶんをきいてくれ。」

と，一びきのキツネが，しっぽをふりふり，三角の耳をぴんと立て，目にはなみだをうかべて，とてもかなしそうにいうのです。

それをきいたアイヌは，ほんとうにおどろきました。キツネのいうことが，ぜんぶただしいのです。

さかなというものは，アイヌばかりが食べる権利があるのではなく，さかなを食べて生きている，そのほかの動物たちも食べれるようにと，神さまがあたえてくれた食料なのです。それを知らないばかなアイヌがいて，キツネの神に悪口をいったのです。

夜のあけるのをまって，村人たちをあつめ，きのうキツネの神の悪口をいったアイヌを，うんとしかりつけ，そのつぐないに宝刀をださせました。そして，酒をたくさんつくり，ヤナギの木をけずってイナウもつくって，キツネの神へ，ていねいにおわびをいいました。(動植物はチャランケをするときに神になり，ことばがはなせる)

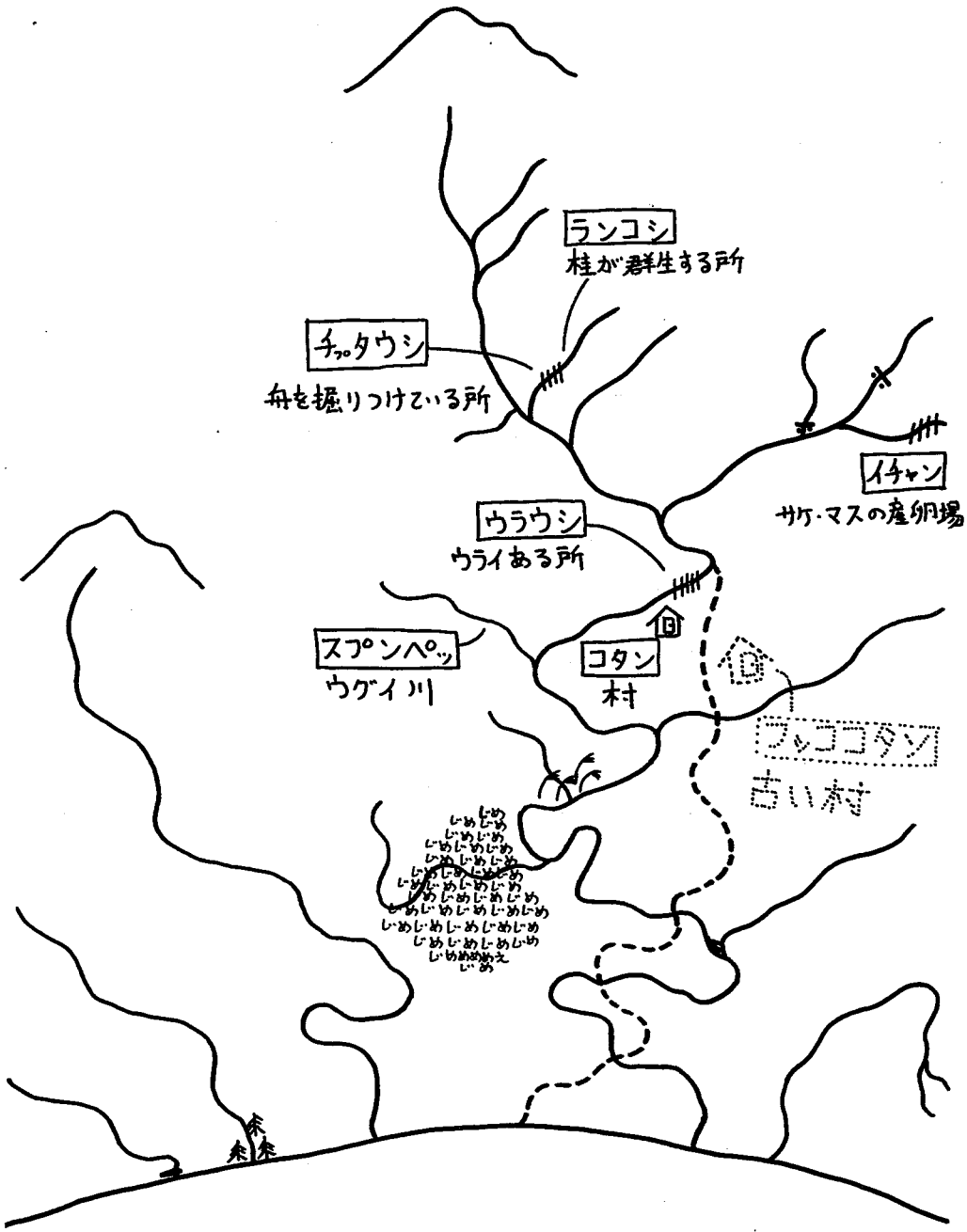
ほかの神さまたちもこれをきいて，キツネをとおくの国へおいやることをやめ，アイヌの国土で，いつまでもすむことができるようにしました。

だから，これからのアイヌよ。川にいるさかなや山の木の実でも，すべての動物たちが，みんななかよくわけあって食べるものだから，けっして人間だけが食べるものと考えてはいけません。

と，ひとりのアイヌがいいながら，この世をさりました。

Ⅲのまとめ

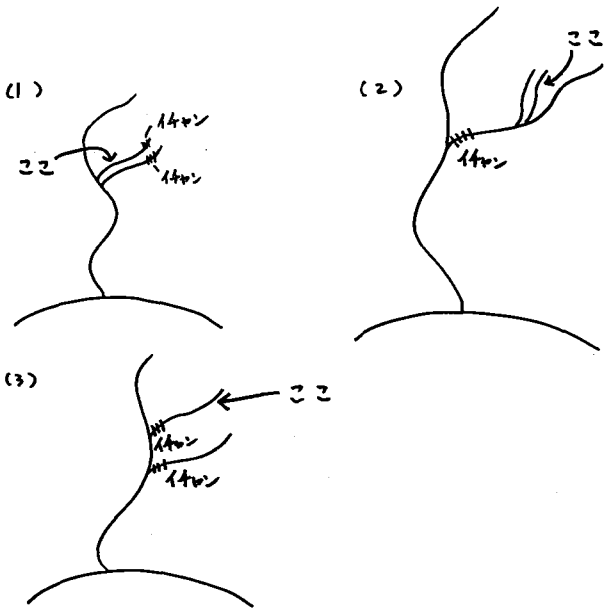
◎食料や生活材料を手に入れるために，人は川にそって山へ行く
◎鮭は，村の位置を決める重大な要因
◎川は，人間だけのものではない。


ランコシ
桂が群生する所
チㇷ゚タウシ
舟を掘りつけている所
イチャン
サケ・マスの産卵場
ウラウシ
ウライある所
スプンペッ
ウグイ川
コタン
村
ピッコタン
古い村
じめじめじめじ

大問題

ペンケオイチャヌンペッは、(1)～(3)のどこか？

ウン　un ; ある



(解　答)

（2）又は（3）

安く，入手し易く，読み易い本の紹介をする。

文　献　紹　介

1. 『シュマリ』手塚治虫　角川書店　上・中・下　各980円（漫画）
2. 『チピヤㇰカムイ』藤村久和　福武書店　1,100円（絵本）
3. 『森と湖のまつり』武田泰淳　新潮文庫　680円（小説）
4. 『炎の馬』萱野茂　すずさわ書店　980円（民話）
5. 『アイヌ神謡集』知里幸恵　岩波文庫　340円（ユーカㇻ）
6. 『アイヌの碑』萱野茂　朝日新聞社　1,200円（自伝・男）
7. 『私一代の話（クスクツアオルシペ）』砂沢クラ　北海道新聞社　1,300円（自伝・女）
8. 『アイヌ墳墓盗掘事件』小井田武　みやま書房　1,800円（歴史書）
9. 『アイヌ―神々と生きる人々』藤村久和　福武書店　2,000円（人の一生）
10. 『アイヌ文化の基礎知識』白老アイヌ民族博物館　1,000円（全般）
11. 『アイヌ語地名を歩く』山田秀三　北海道新聞社　1,500円（随筆）
12. 『和人は舟を喰う』知里真志保　北海道出版企画センター　1,200円（小論集）

おわりに

このプランの特徴は，アイヌ語で地名を考えようとした点にある。

（従来）現行地名の由来を調べ，アイヌ語の訳を行ない，地形を見る。
- 音別→オムペッ→オ・ム・ペッ；川口・ふさがる・川→砂で川口のうまっている地形→なるほど

（本プラン）地形から，地形と人の生活との係わりを考え，アイヌ語地名のおよその法則性を利用して地名を考え，最後に現行地名では，どんな形の名に変形しているかを知る。
- 砂で川口のうまっている地形→舟の通行が困難→川口・○○している・川→オ・ム・ペッ；川口・ふさがる川→オムペッ→音別→そうだろうな。

従って授業者には，単に地名アイヌ語の訳を知っているだけでなく，アイヌ語・アイヌ文化の実感的な理解を要求しているといえる。

地名に関していえば，身近なアイヌ語地名を，かつてのアイヌの生活を考えながら歩き，授業用の写真の撮影をしたり，山菜でも採りながら「歩く」ことが第一にすべきことなのかも知れない。

プランの改良とともに，授業者が最低どんなことを知り，実感していなければならないかを見定めておく事が，「使えるプラン」とするための課題となる。

参考文献

知里真志保『アイヌ語入門』1956　にれ書房
同　『地名アイヌ語小辞典』1956　にれ書房
同　「アイヌの鮭漁」1959『北方文化研究報告』第14輯
同　「言語と文化史」1949　米村喜男衛編『北海道先史学十二講』
山田　秀三『北海道の地名』1985　北海道新聞社
同　「アイヌ語地名の話」1987『角川日本地名大辞典1北海道下』
白戸　仁康『美唄アイヌ語地名考』1987　美唄市
更科　源蔵「さっぽろ地名説」1977　札幌市教育委員会文化資料室『さっぽろ文庫1札幌地名考』北海道新聞社
萱野　茂『アイヌの民具』1977　すずさわ書店
同　『キツネのチャランケ』1974　小峰書店
泉　端一「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」1952『民族学研究』16巻3・4号
いがらしみきお『ぼのぼの』① 1987竹書房
白土　三平『カムイ外伝』⑮ 1986　小学館
松本　成美「地名を授業にとりいれる」1985　北海道高等学校教職員組合教文部少数民族専門委員会編『続・生徒とともに考える日本の少数民族』
白老アイヌ民族博物館『アイヌ文化の基礎知識』1987　白老アイヌ民族博物館